



## 平成17年度の野球殿堂入り決定

事務局長 小林二三男

野球殿堂は、日本の野球の発展に大きな貢献をした方々の功績を永久に讃え、顕彰するために昭和34年に創設されました。現在、競技者表彰で64名、特別表彰で87名の合計151名の方が殿堂入りし、レリーフが掲げられ、その栄誉は永久に受け継がれております。

勸野球体育博物館は平成17年度野球殿堂入りについて、1月6日(休)に第45回競技者表彰委員会の開票、翌7日(金)には第44回特別表彰委員会を開催し、3人の殿堂入りを決定いたしました。

競技者表彰委員会から元ロッテ・オリオンズ投手の村田兆治氏と元西武ライオンズ監督の森 祇晶氏が、特別表彰委員会からは元NHKアナウンサーの志村正順氏が選出されました。

記者発表は1月11日(火)午後3時より博物館の殿堂ホールにおいて行われ、根來理事長より各顕彰者に殿堂入りの伝達があり、通知書が授与されました。

殿堂入りされた村田兆治氏は「野球に出会わなかったら、今の自分はなかった。これからは離島振興のため、島民との親善試合や少年少女たちに野球を教えたい」、91歳のご高齢にもかかわらずお元気でご出席された志村正順氏は「91年生きてまいりましたが、今日が一番うれい日です。」と感激の面持ちで喜びを語られました。ハワイ在住でスケジュールの都合で欠席された森 祇晶氏からは「長年、野球界に身を置いてきただけに、多くの方に感謝の気持ちを伝えたいと思います。」と喜びのコメントが寄せられました。

村田氏のゲストスピーカーには、元ロッテの監督で、殿堂入りの大先輩でもある金田正一氏を、志村氏のゲストスピーカーには、NHKアナウンサーの後輩で、横浜国際総合競技場の初代場長の重責を果たされた西田善夫氏をお迎えし、顕彰者の現役時代の貴重なエピソードや楽しいお話を語っていただきました。

(表彰式は、7月22日西武ドームでのオールスターゲーム第1戦で行います。)



左から 根來泰周理事長、志村正順氏、村田兆治氏、小池唯夫常務理事、豊蔵 一常務理事



左から 西田善夫氏、志村正順氏、村田兆治氏、金田正一氏



## 競技者表彰委員会

第45回競技者表彰委員会は、「マサカリ投法」と呼ばれた独特のフォームで通算215勝を挙げた元ロッテの村田兆治氏(55)と、西武監督として6度日本一に輝き、現役時代は巨人のV9メンバーとして活躍した森祇晶氏(68)を選出した。

村田氏は記者発表のあと、殿堂ホールに1人残って先人たちのレリーフを見上げながら、しみじみと話していた。「(殿堂入りを)野球人生の卒業式にしちゃいかんですよ。僕なんか若輩者なんですから、もっと社会のために働けというゲキと受け止めたい」。その一つとして引退後続けてきた離島の野球教室を、今春からは「マサカリ・ドリームス」の名前で、チームとして行っていくという。



村田兆治氏 (写真提供 ベースボール・マガジン社)

ゲストスピーチしたロッテ時代の監督、金田正一氏は「想像を絶する練習量に耐えた。努力に耐えて努力する選手だった」と評した。豪快なフォームから繰り出す速球とフォークを武器にするエースだった。通算215勝。プロ15年目の82年に右ヒジを痛め、翌83年には渡米して当時タブーといわれたメスを入れた。左手のケンを移植するという手術に「もう一度投げたい」の気持ちで耐え、厳しいリハビリを経て復活した。

85年には17勝、カムバック賞を受賞している。今もトレーニングは欠かさず、体重も現役時代とほとんど変わらない。OB野球のマスターズリーグでは141キロを記録して周囲の度肝を抜いた。「プロのボールを見せたいからね。みんな感動してくれる。勝ち星の数だけ(離島を)回りたいね」。殿堂入りを機に村

田氏の夢は広がっている。

森氏は昨年から生活の拠点にしているハワイで朗報を聞いた。スケジュールの都合で記者発表の席には加わらなかった。「殿堂入りなんて他人事だと思っていた。選挙日も知らなかった」と喜びより、驚きのほうが先だったようだ。



森 祇晶氏 (写真提供 ベースボール・マガジン社)

巨人時代の1961年に訪れたドジャースのベロビーチ・キャンプがその後の自らを支え、同時に野球そのものも変えたという。「データとかフォーメーションを考えることが好きだった。あのキャンプがそういう興味を持たせてくれた」。川上監督のもと、ONらと巨人を引っ張り「V9の頭脳」といわれた。後に監督となっても、ベロビーチ・キャンプの経験を生かした。考えは変わらなかった。「勝つ野球、質の高い野球」にこだわり、西武を巨人に負けない常勝軍団にしてみた。ユニホームを脱いで2年、ハワイに移っても日本の球界が気になる。「今が変わるチャンス。球界は変わらなければいけない」。今まで以上に厳しい目で見守っている。

競技者表彰委員会は、現役を引退して5年を経過している競技者(選手、コーチ、監督、審判員)を資格者とし、野球報道に関して15年以上の経験を持つ委員の投票(10名連記)で選出する。3分の2以上の有効投票があれば、その7割5分以上の得票者を野球殿堂入りとする。今年の委員数は291人で、有効投票は287。幹事会が選出した32人の候補者の中、村田氏が234票、森氏が223票を集めて当選必要数の216をクリアした。

競技者表彰委員会代表幹事  
米谷 輝昭



## 特別表彰委員会

1月7日、東京ドームホテルで行われた平成17年度第44回特別表彰委員会で、プロ野球の創生期から戦後の隆盛期まで多くの名試合を流麗な語り口で実況放送を続けた名アナウンサー、志村正順氏の殿堂入りが決定した。

前年までの候補者名簿から、平成16年度殿堂入りの秋山登氏、過去数年得票が少なかった新田恭一、木塚忠助、湯浅禎夫の4氏（いずれも故人）を除き、新候補者として推薦された川島廣守、豊田泰光の両氏と昭和30、40年代に阪急ブレーブスで活躍したダリル・スペンサー氏を加え、出席14委員の記名投票の結果、志村正順氏が96年の前高野連会長・牧野直隆氏以来の満票、14票を得て殿堂入りが決まった。



志村正順氏

志村氏は1913年（大正2年）10月2日、当時の東京府北豊島郡南千住（現・東京都荒川区南千住）生まれ。36年、明大政経学部を卒業後、NHKに入局。当時はベテラン・アナウンサーが東京六大学野球の実況中継を担当、新人の志村氏は誕生したばかりの職業野球の実況中継担当で、36年11月29日、満潮時には外野から海水がヒタヒタと押し寄せることで知られた洲崎球場での巨人－セネタース戦で、いまや伝説中の大投手、巨人・沢村栄治投手のプロ野球公式戦での活躍ぶりをラジオで初めて伝えた。「沢村、スパイクの靴底がはっきり見えるほど、左足を高々と上げました」と沢村独特のピッチングぶりをこま

かく描写、評判になった。

まだ東京が焼け跡だらけだった1945年11月23日、戦後初のプロ野球試合、東西対抗戦も「久しぶりに、本当に久しぶりに、職業野球の実況中継をお送りします」という志村アナウンサーの声で放送されたし、1946年春、上井草球場で行われた東京六大学リーグ再開第一戦の帝大（東大）－明大戦も志村氏の担当で、野球史上のフシ目フシ目の試合実況を放送し続けた。

52年、ヘルシンキ・オリンピックの中継を担当、帰国途中、ニューヨークのヤンキースタジアムに立ち寄ったとき、ヤンキース黄金期の大打者、ジョー・ディマジオが実況放送のコメントーターをつとめていたことに感動して帰国後、前松竹ロビンズ監督で2リーグ分立後初のセ・リーグ優勝を果たした小西得郎氏に白羽の矢をたて、日本の野球放送史上初の解説者に起用。それまで情景描写が中心だった野球実況中継にアナウンサーと解説者の会話のやりとりの面白さを導入、現在の中継放送のスタイルを確立した。

53年、日本のテレビ本放送の第一声も志村氏だったが、59年のプロ野球初の天覧試合、巨人－阪神戦も志村－小西コンビの実況放送で、69年に退職するまでラジオ、テレビでプロ野球、東京六大学野球、大相撲の実況アナウンサーとして活躍。流麗で歯切れのいい語り口は「機関銃」とも呼ばれ、人気があった。

平成17年度から特別表彰委員に就任した元NHKアナウンサー・西田善夫氏は「放送というメディアが野球振興に果たした貢献、その先頭に志村さんがおられたことを球界が忘れていなかったことだ」と祝福。1月11日、野球体育博物館内で行われた記者発表には91歳になる志村氏も出席、「91年間、生きてきた中で、今日が一番嬉しい日です」と現役時代を思わせる歯切れのいい口調で受賞の喜びを語っていた。

特別表彰委員会委員

田村 大五



モの  
知ってほしいこんな資料(50)

ポスター「大阪タイガース来る」!

大日本東京野球倶楽部(現読売ジャイアンツ)創立から1年後の1935年12月10日、2番目の球団として株式会社大阪野球倶楽部(現阪神タイガース)が誕生、さらに翌36年1月から2月にかけて5球団が生まれ、同年2月5日に7球団により日本職業野球連盟が結成されました。今回は、今年創立70周年を迎えた阪神タイガースのポスター「大阪タイガース来る」をご紹介します。

このポスターは、当館の開館当初に寄贈された資料で、タテ104cm、ヨコ75cmでB1より若干大きなサイズです。豪快にスイングする選手を中心に、右に「大阪タイガース来る」、左に現在も変わらぬ虎の球団マークとメンバー表が配置されています。戦前というどうしてもモノクロのイメージが浮んできちゃいますが、このポスターは強烈な赤を背景に使用し、B1強という大きさもあって70年経った現在でも鮮烈な印象を与えてくれるポスターで、新しく誕生したプロ野球の「気概」のような勢いを感じさせてくれます。

当館で収蔵しているポスターは、試合の告知を目的に日程や料金を伝えるものがほとんどですが、このように球団自体の告知、プロモーション用に製作されたものは大変めずらしいです。メンバー表には36年8月まで在任の初代監督森茂雄氏(77年殿堂入り)の名前があり、このポスターの製作時期も36年8月以前だと考えられます。また、メンバー表の下には、「Genichi Hayakawa」とサインが入られています。これは、阪神電鉄の社員だった早川源一氏(球団マークも早川氏のデザインといわれる)のサインで、当館では早川氏製作のポスターをこの他にも、「1950年日本ワールドシリーズ」など10数点収蔵しています。

現在このポスターは、常設展「プロ野球の歴史」コーナーに展示中です。また、2月23日から、大阪歴史博物館で開催される特別展「ファンと歩んだ70年 阪神タイガース展」に、このポスターのレプリカを貸出します。

同展には、この他にも吉田義男氏(92年殿堂入り)使用クラブや岡田監督が日本シリーズ制覇の85年に着用したユニホームなど合計22点を出品予定です。

学芸員 関口 貴広



企画展&展示情報

企画展「名選手のサイン展  
～だれのサインかわかるかな?～」

会 期 平成17年2月8日(火)～4月10日(日)  
会 場 館内多目的ホール

ペーブ・ルースや王貞治ら往年のスター選手から、イチロー選手や松坂大輔投手まで、名選手たちのサインボールや色紙をはじめ、サイン入りの用具などを展示し、各選手のサインをクイズ形式で紹介いたします。



常設展 「日本代表コーナー」

2004年アテネ五輪で銅メダルを獲得した長嶋JAPAN24選手ユニホームを展示中です。ベンチで試合を見守った日の丸と監督ユニホームも引き続き展示しています。





## コラム／博覧・博楽 (13)



### 写真の話・写真探しの苦労と楽しみ

大西 鉄弥 (日本スポーツ出版社「ホームラン」野球編集部)

雑誌を作っていて、ないと困るものはいくつもある。文章はもちろん、読みやすいレイアウトも必要だ。中でも、写真は読者の目をひくために絶対に欠かせない。しかも写真だけは、その場においてその瞬間にシャッターを押さなければ手に入らないものだから、ないときにはどうするかが編集者の腕の見せ所となる。

零細出版社の悲哀なのだが、写真は、買うと高いのだ。高校野球の歴史を振り返るムックを作っているとどうしても昔の写真が必要となる。新聞社に「〇年に甲子園に出場した〇〇高校の写真ってありますか」と聞くと、「はい。ございます。〇万円です」と、びっくりするような値段が返ってくる。

あるときは、ある新聞社に数十年前の甲子園出場チームの写真があるかどうかうかがうと「探すのはよいが、探すのに時間も手間もかかる。見つかったら絶対に買ってこれ」と言われたこともある。結構な値段だったこともあり、「現物を見る前に買うかどうかなんて決められない。それなら結構です」というせりふが喉元まで出かかったが、結局買った。

予算は決まっている、でも写真は欲しい、ではどうするか。一例を挙げよう。あるムックを編集中に、M商業で活躍し、後にプロに入ったT氏の写真が必要となった。T氏は編集長のTと懇意だったのだが、当時の写真はないとのこと。そこで、OB会に趣旨を説明し、そこを通じてT氏と同級生の方をご紹介頂いた。その方のご厚意で個人的に撮影した写真を数枚お借りできた。他の選手とバットを構えているシーンや集合写真など、どの写真も今まで他の雑誌には掲載されたことのない貴重なものばかり。お借りした写真を、ムックに掲載できたことは望外の喜びだった。もちろん貴重な品だけに、必要なものだけ複製して、すぐにお返しした。

時には冷や汗が流れることもある。

R大学に昔、隻腕の監督がおられた。今もご健在なのだが、その方にお話をうかがい野球部のOBの方からお借りすることになった。締め切りが迫っており、お写真を送っていただき、そのまますぐに入校してしまった。無事に責了になり、印刷所から写真が戻ってくると、写真が破れていた。先方も写真を扱うプロだからミスしたとは思えないし、万が一そうしたらすぐに連絡が来るだろう。考えられるのは、入校時に私が間違えて破ってしまったことだ。しかし、こちらも記憶がない。しかし、破れた写真が目にある。しかたがない。こちらの不手際をわびるために連絡をすると、「いやあ、アルバムからはがすときにやぶってしまいました」とおっしゃった。ホッとしたものの、入校の際に気がついていなくてもよいのに、それを見落としてしまったのは、注意が足りなかった。

お借りするものは写真だけとは限らない。歴史のある学校から「野球部史」をお借りすることもある。戦後直後に甲子園に出場した野球部には、立派な部史を作っておられるところも多い。当時の資料としては一級品である。

こちらの勉強不足もあるが、このときに甲子園の砂を初めて持ち帰ったのが、高等師範学校付属のナインだったと知った。

一枚の写真、一冊の部史は、エピソードの宝庫である。それぞれのエピソードを集めていけばそれだけで百科事典レベルのボリュームになってしまうだろう。戦前戦後に球児だった方は、もうかなりの高齢ははずだ。できるならば当時の球児に話をうかがい、当時の高校野球について語ってもらいたいとも思う。「甲子園」という大舞台でなくても、様々なドラマが埋もれているはずだ。誰もが知っている豪華絢爛なエピソードではなく、今まで語られたことのない「神史の高校野球」を発掘してみたいものだ。

写真を見ているとあっと思うことも多い。

前述のT氏は、名内野手として一世を風靡した人物だ。高校時代は主将、主砲とまさにチームの中心。その彼の高校時代の写真を見て、編集長がボソッと言った。「どの写真も自分が真ん中だな」。やはり一流とも言われる選手ともなると、高校時代から立ち位置が決まっているようである。



## 📖 こんにちは図書館です 📖

### ～戦後の野球雑誌～

戦後、1946年～1948年にかけて、野球雑誌が多く発行されました。これらの雑誌は、発行期間は短いものでしたが、中身の濃い雑誌が多く、戦後の野球を盛り上げようとする意気込みが感じられます。今回は、その中で図書館に所蔵してある主なものを以下に表にしました。これらの雑誌は図書館で閲覧できますので、ぜひ図書館にお立ち寄りください。

司書 山根 礼子

誌名	当館で所蔵している年代	所蔵冊数	発行所	特徴
日本スポーツ	1946年～1950年（月3回）	115	日本スポーツ社	大衆スポーツである野球が日本再建に重大な役割を果たすとの考えから発行。約10ページ。関西の野球記事が多い。
ボールフレンド	1949年	11	球友社	阪神の若林忠志氏が社長で、藤村富美男氏、別当薫氏、呉昌征氏が重役となって作った少年野球雑誌。
野球少年	1947年～1949年（月刊）	19	尚文館	小学生向けの雑誌。付録などもついていた。NHKのアナウンサー志村正彌氏の連載記事「読上放送」は、六大学やプロ野球の試合の模様を描写しているかのように書かれ人気があった。
野球倶楽部	1949年～1950年（月刊）	15	尚文館	「野球少年」の兄弟雑誌。プロ野球の記事が中心。
野球時代	1948年～1949年（月刊）	20	野球時代社	鈴木惣太郎氏、新田恭一氏、小西得郎氏と3人の野球界の先輩達を中心に作った雑誌。
野球王	1949年	5	神戸新聞社 熊本日日新聞社 南日本新聞社	何号かごとに発行の新聞社が変わり、その地方の野球情報が載っている。
野球世界	1948年～1950年（月刊）	25	スポーツ画報社	慶応大学野球部出身の松尾俊治氏が編集人。高校、六大学野球の記事も載っている。
オール野球	1946年～1948年（月2回）	11	体育世界社	速報誌物誌として登場。楽しむための主旨で創刊された。
オール野球	1948年～1950年（月刊）	17	萬国書院	体育世界社から出版社が変更になり、表紙がカラーになり、ページ数も倍ぐらいに増えた。
野球日本	1948年～1950年（月刊）	25	野球日本社	プロ野球の本当のおもしろさを探ろうといった主旨の雑誌。
熱球	1947年～1948年（月刊）	9	巨人軍後援会	巨人軍後援会が作った雑誌。巨人の内容ばかりでなく、野球全体の雑誌になっている。
野球ファン	1947年～1951年（週刊）	103	スポーツファン社	発行当時、月刊が多い中、12ページほどだが、週刊で出版していた。プロ野球の試合結果も載せている。
ベースボールタイムス	1946年～1949年（月2回）	42	ベースボールタイムス社	ページ数は少ないが、関西野球試合結果が多く載せている。
ホームラン	1946年～1951年（月刊）	51	童書社/ホームラン社	プロ・アマの野球に関わることをすべて取り扱っていき主旨の雑誌。
スラッガー	1947年～1948年（月刊）	6	スポーツ出版社	三原格氏が企画していた雑誌。日本の野球をより高度なアメリカ野球に近づけるために創刊された。



日本スポーツ



少年ボールフレンド



野球少年



野球倶楽部



野球時代



野球王



野球世界



オール野球



オール野球



野球日本



熱球



野球ファン



ベースボールタイムス



ホームラン



スラッガー



## 【維持会員を募集しています】

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万点を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。(1～3ページをご参照下さい)

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

### 会員の特典

- ・当博物館発行「ニュースレター」(季刊)送付します。
- ・博物館の年間優待証を発行します。
- ・会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
- ・イベント情報などを優先的にご案内します。
- \*新会員には上記の特典のほか「The Baseball Hall of Fame & Museum 2002 ～人で振り返る野球

ハンドブック～」を進呈します。

### 会員の種類と会費

年会費(4月～翌年3月迄)

法人 1口 10万円 個人 1口 1万円

年度の途中でのご入会の場合は、初年度年会費の割引があります。

ご入会月	維持会費(個人会員)
4月～9月	10,000円
10月～12月	5,000円
1月～3月	2,000円

### ご入会の方法

- ①館内にあります「維持会員募集のご案内」の「入会申込書」に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。  
「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、博物館までご連絡ください。
- ②「入会申込書」が届きしだい「維持会費のご請求書」をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

### お問い合わせ

博物館 業務部 高城・竹内

皆様のご協力、よろしくご願ひ申し上げます。

## 博物館からのお知らせ

### 【人 事】

当館の管理部長・山口 渡が拠東京ドームへ異動となり、後任に拠東京ドームから堀 俊夫が向出し就任いたしました。

### 【プロ野球12球団コーナー】

館内の「プロ野球12球団コーナー」は、3月末ごろには2005年シーズンのものに替わる予定ですので、お楽しみに!

### ●博物館のご案内

- 場 所 東京ドーム21ゲート右
- 開館時間 3月1日～9月30日AM10時～PM6時  
10月1日～2月末日AM10時～PM5時  
(入館は閉館の30分前まで)
- 入館料 大人 400円(300円)  
小・中学生 200円(150円)  
( )は20名以上の団体
- 休 館 日 月曜日(祝日、プロ野球開館日、春・夏  
休み中の月曜日は開館)  
年末年始(12月29日～1月1日)

### 《2月・3月・4月の休館日》

2月 7日・14日・21日・28日

3月 7日・14日

4月 11日・18日・25日

\*3月15日(火)～4月10日(日)まで無休です。

\*3月から開館時間が10時～18時(入館は17時30分まで)となります。

●編集後記 昨年11月から入口付近でエレベーター設置工事を行っておりご不便をおかけしていますが、通常どおり開館しておりますのでぜひご来館下さい。なおエレベーターは2月末に完成する予定です。  
連載「殿堂入りの人々を語る」は都合により休載します。次号をご期待下さい。

### Newsletter Vol.14 / No.4

2005年1月25日発行  
編集・発行 財団法人 野球体育博物館  
〒112-0004  
東京都文京区後楽1-3-61  
Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369  
<http://www.baseball-museum.or.jp/>  
定 価 100円



Vol.14 / No.4



## リレー随筆(19)

## プロ野球に夢はあるか

競技者表彰委員会幹事 石田 康博(共同通信社)

プロ野球は昨年「古希」を迎えた。1934年12月26日に巨人の前身である「大日本東京野球倶楽部」が日本初のプロ野球チームとして正式に発足して以来、70年が経過したことになる。あらためて言うまでもないが、その発足時には沢村栄治、スタルヒン、水原茂、中島治康など、そうそうたるメンバーが名を連ねていた。

さてテーマは「プロ野球に夢はあるか」である。70歳になった球界は昨年、大きく揺れ動いた。2リーグ分立時からパ・リーグで唯一名を残していた近鉄がオリックスと合併して消滅し、タイガーも球団を譲り渡した。代わりに楽天、ソフトバンクという時代を先導する情報技術(IT)関連産業が新たに加わった。沢村栄治が生きていたら88歳の米寿になる年だが、今の球界にどういう感想を持つのだろうか。戦争さえなければ生きていたかもしれないと思うと、少し残念な気もする。

テーマの結論を先に書くと「プロ野球に夢はある」だ。確かに状況は厳しい。パ・リーグは毎年、30億を超す赤字を抱える球団が軒並み経営難という深刻な問題に直面している。みんなメジャーに行ってしまうというスター不在の現状もある。「縮小」がキーワードとして語られる状況に「夢」という言葉はふさわしくないかもしれない。

しかし、それでも「プロ野球に夢はある」だ。ジョン・レノンじゃないけど「イマジン(想像してごらん)」だ。例えば、若いたくいまれな才能が毎年、どこかで生まれていることを考えてみよう。例えば、いずれ日本シリーズを制したチームがメジャーのプレーオフに参加することを期待しよう。例えば、チーム名からすべての企業名が消えて完全なフランチャイズ制が実現することを願おう。みんなもっと想像力を持とう。想像力をたくましくしよう。そこに夢は広がっていく。

夢は動機につながる。動機は人を動かす。夢のないところに未来はない。日本プロ野球組織(NPB)も労働組合・日本プロ野球選手会もいい夢を見よう。同じテーブルについて一つ一つ問題を解決していったらいい。「同床異夢」ではない、共通の将来像を描いたらいい。利己を捨てて、共存共栄を図ればいい。

昨年、球界再編問題があれだけファンの関心と呼んだことを考えてみる。普段、球場に足を運ばない人まで多分、意見を持った。心の底にある何かが呼び起こされたかのようでもあった。それが「野球は文化」ということだろう。

70年かかって野球は精神的な部分で人の心に住み着いてきたわけである。だから悲観することはない、と思う。プロ野球は死んではない。明るい未来を語るにためらうことはない。

中国で想像上の動物とされる「麩」がいる。熊とか牛とか象がごちゃ混ぜになって、足は虎だという。何とも奇っ怪な姿に中国の人は、人の悪夢を食べるという役割を持たせた。日本の球界はその「麩」を飼おう。悪い夢を食べてもらって、いい夢だけ残そう。

2005年、危機的状況が続くと言われている中で、球界はどんな方向に進むのか。つらつらと思いつくことを書いて、最後にもう一度、「プロ野球に夢はある」。